

梅光女学院大学を

卒業して

清川 宣子

(梅大1)

四年前、霧雨にけむる山陰の海を、貸切バスの窓外に眺め、不安と期待に、胸を一杯にした事が、なつかしく想い起される。

私達新入生が、梅ヶ峠の学舎に到着して、先ず目にしたものは、工事現場のプレハブ事務所と、荒削りの地肌を見せている赤土のグラウンドであった。数個の教室、チャペルに使用する合同教室、図書室と研究室それに、現在でも、学生同志の立話の姿の多い明るい学生ホールが、学舎の全てであった。新入生百余名は、その中で生活を始めた。教養課程での、文学、哲学、心理学、法学等の講義は心に

残り、急に自分達の視野が広まったように感じた。専門課程に入ると、様々な個性をお持ちの先生方の興味ある講義が始まった。私の場合、国文学科であったが、様々な講義の型は、卒業論文執筆にあたっての方法論の示唆になるものだった。年二回の考查日には、学舎が緊張と静寂に包まれ、私達学生は、この雰囲気を楽しんだ。

この様な、緊張の最高は、しかし、なんとといっても、卒業論文であった。四年生の時の夏期休暇以後、稀れに学舎で顔を合わせると、話題は卒業論文の事であった。友人達は、可成古くなった紙袋に、抽出したカードを入れて、小脇にはさみ、図書館に通い、先生の研究室を訪問していた。提出日は一月十六日で、その日の午後五時以降は一切受け取らないとの事であった。実際、五時には窓口は締められた。国文、英文共に、表紙をつけ、製本して(国文の場合は、製本業者に頼み、金文字を入れなければならなかった。学生の中には、印刷屋でも筆を走らせた人もいた。)提出した。提出後は、緊張から急に解き放たれ、弛緩状態が訪れ、次に、四年間の大学生活を反省してみる事となった。四年間は、本当に短いものだったし、四年間学んだという事実に対して、実際は、未だ、出発点でしかない事を思い知らされた。そして、異口同音に、殆どの学生は、もう

少し勉強したいという感想をもらった。卒業生の中には、実際、大学院を目指す人もいた。が、しかし、殆どどの学生は、職業に就いた。新設大学、しかも四年制の女子大を卒業した私達に、就職の門は広くはなかった。この現実には、入学当初から想像できていたので、友人達は、勉学の間に、その方面での努力をしていたようであった。現在、卒業して約二ヶ月、友人達は、様々な所に就職している。街角で出会うと、「頭が硬化しないうちに、何か、ライフワークみたいなものを、それも、大学で学んだものを基礎とするようなものを始めたい」と言っている。

私達卒業生が、第一回の卒業式に臨み、ガウンを身にまとい、証書を、一人／＼手渡された時に、自からのうちに目覚めたのは、いつの間にか身につけていた、自分のおかれた環境の中で、それを愛し、その中で自己を生かすべく努力する力ではなかつたろうか。自然環境と、教授陣については、可成恵まれていたし、図書も比較的揃っていたが、種々の面に、新設大学である為の不利な条件が、そして学生の中にも、その為の一種の負い目があったが、卒業式を終えた時、多くの学生の胸中にあつたのは、それらを認めた上で、自分を、梅光女学院大学の第一期の卒業生だと言いつける事のできる自覚ではなかつたろうか。卒業式は、様々

な、愉快なハブニングを生み、なごやかに終わった。

他に、大学生活の中の思い出に印象深く残っている事に、秋芳台での生活オリエンテーション、全員が、何かの役目に就いた第一回の大学祭、そして感激にみちた、しかも素朴に簡素に行ったクリスマスがある。そして、初めて先輩をむかえた時の、何かしらこそばゆいような感覚も忘れる事ができない事の一つである。

社会は、私達大学生活四年間のうちに、大きく揺れ動き、大学は、その中で最も問われたものの一つであった。梅光も、勿論、このような社会状況を無視できなかった。学生、教授共に、現在も、そしてこれからも常に、梅光の存在そのものを問い続けてゆく事だろうと思われる。